

時間の止まった町

伊藤ヘルツ

僕は小高い丘の上で横になり、時折頬に当たる穏やかな風や、さらさらとした草の音を感じながら、晴天に浮かぶまだらな雲を見ていた。

普段の数百分の一のテンポでゆつくりと瞬きをする
と、面白いほど雲が変容し西へ流れて行く様子が見て
取れた。へんようそんな動作を数分程繰り返していると、空は
多感な少女のように全く違う表情になった。

『時間の止まった町』伊藤ヘルツ
『変容しているのは雲ではなく大地である。つまり、

地球の回転により雲が流れているように見えるのであり、雲そのものは静止しているものなのだ。また、風という自然現象は地球の回転により発生しており、風の強弱というのは即ち回転速度のムラである』

十年程前まで、僕は本気でそう信じていた。当時六歳だった僕は、いつも空を見上げては地球の回転をこの目で確認していたものだ。空を見上げていると、地球の遠心力と引力を体で感じているような気分になり心地良かった。

ふと視界の角で何かが動いた。そつと上半身だけ起

こし注意をはらうと、数メートルほど離れたクスノキの側に一羽の白ウサギを確認した。白ウサギは何かを夢中にかじっていたかと思うと、今度は傍らかたわに茂っているキンポウゲにちよつかいを出し始めた。

しばらくその滑稽こっけいなウサギの動作を観察していると、ウサギの方も僕が存在に気付き、僕たちはしばし見つめ合う形となった。それが人間同士ならば若干気まずい瞬間ではあるが、相手が小動物なので全く気にはならなかった。もつとも、ウサギにとってみれば不測の事態であつたことだろう。

僕は好奇心を覚え、ウサギを捕まえようとして少しだけ距離を詰めた。途端にウサギは、ビツクリ箱に驚いた子供のように後ろへ飛び退いた。そしてその直後、僕の中にえも言われぬ不快な感覚が拡がった。それは胸の中心部を締め付け、熔解した鉛を耳の穴から流し込まれているような気分だった。

そっちへ行つてはいけない……。危険だ……。戻つておいで……。

僕の頭の中で囁く声がした。

しかし僕に驚いたウサギは、ノタノタとクスノキの

裏手へと逃げて行く。

だめだ……。そっちへ行つてはいけない……。危ないから戻っておいで……。

僕は囁く声を掻き消すかのように頭を振り、ウサギの後を追った。

クスノキの裏手へ辿り着いた僕は、信じられない光景を見た。それと同時にあの不快な感覚の原因も分かった。

「き、君は……」

一人の少女がクスノキを背に佇たたずんでいた。年齢は六

歳くらいだろうか？ ノースリーブのワンピースには所々に泥が付いており、せつかくの純白が台無しになっていた。しかし少女はそんな事を気にする様子も見せず、好奇心に満ちた大きな瞳を僕に向けていた。少女の両耳の上で結ばれた髪が時折風に揺れるのを見て、僕は天候の変化を読み取った。しかし、今の僕にはそんな事はどうでも良いことだった。

「き、君は……誰？」

その少女が誰であるかは自分が一番知っているくせに、僕は上擦った声で問いかけた。

僕の喋り方が滑稽だったのか、少女はクスクスと笑いながら僕に背を向けた。そして上半身だけ僕に向き直り、小さな手で手招きをした。ヒラヒラと動くその手のひらは、まるで新緑のキャベツ畑を舞うモンシロチョウのように見えた。

そして困惑しきった僕を尻目に一歩クスノキへ近づいた。

「待って……」

しかし少女は更にもう一歩進み、クスノキに身を寄せた。

「危ないから……戻っておいで」

そして少女はゆっくりと消えて行った。

少女は僕の前から消えてしまった。

僕の両手を擦り抜け消えてしまった。

そこには、少女の髪を結っていた白いレースのリボンだけが残った。

2

カーテンから差し込むボンヤリとした日差しで目が

覚めた。光線に照らされた極微量の埃は、ほこり炭酸飲料水の水泡のように蠢き光の外へと逃げて行つた。うごめ

この十年もの間、何度あの少女の夢を見ただろうか？ 僕は差し込む日差しが織り成す光の演芸を惜しみつつ、深紅のカーテンを開けた。そこには当たり前のように夢に見た風景と同一のそれが見えた。広がる草原、小高い丘、そしてそこにそびえ立つ巨大なクスノキ。何一つ変わらないいつもの風景。

クスノキの樹高は二五メートル、じゅこう幹周は二十メートルあり、その樹冠はじゅかん辺り一帯を覆い隠してしまうほど

の壯観だった。地表に露出した根幹こんかんは地中深く根をおろし、大地の養分を数百年に渡り吸収し続けているのだろう。

そして丘の周囲には広大な草原が広がっており、そんな海原の直中ただなかに僕の住んでいる小屋は佇んでいた。小屋の前を横切り丘の向こう側まで続いている未舗装の小道は、まるで引き潮の際に現れる海底のようだった。となると僕の小屋はさしづめ、今にも沈没してしまいそうな頼りない小舟と言ったところだろう。

草原は、季節によって表情を目まぐるしく変容させ

る。風を全身で感じ取り一斉に体现するその様は、正に荒れ狂う大海原に放り出された錯覚を覚えるが、雨の日には新緑の葉から滴る雫を大地へ還元する優しき使者となる。そして草原は季節と共に枯れ色へと変化し、再び青葉となり復活を遂げる。

しかしそんな^{げんぜん}厳然且つ^{ゆうび}優美な光景も、あの^{きよじゆ}巨樹の前では色褪せてしまう。いや、すべては丘の上への演出に過ぎないのかもしれない。

小島の様な丘の上にそびえ立つクスノキは、僕の十年来の生体活動に密接していた。睡眠から覚醒し深紅

のカーテンを開けた瞬間から、夕暮れてランプに火を
灯すまで、そして再び眠りに落ちるまで、僕は可能な
限りあの樹形じゅけいを観望かんぼうすることになっている。風に揺らぐ
葉、その葉を支える枝の軋み、樹冠の中で守護されて
いる無数の生物たち、根から養分を吸い上げ体内を流
動する音すら聞き逃すまいとする自分がいる。何故な
ら、それが僕の責務に思えてならないからだ。誰に命
じられたわけでもないその責任と義務は、もちろんい
つでも破棄することができ。しかし僕には、おいそ
れとそれを破り捨てることができない理由があつた。

僕はクスノキの根幹へ目を落とした。丘を丸ごと鷲掴みにしたようなその根は、いつも僕に畏怖の念を再認させてくれる。そして夜陰やいんに浮き出る巨大な樹冠は、さながら悪魔が己を誇示するかの如く翼を開いているようだ。そして眠りに落ちる寸前の僕に覆い被さり、跡形もなく消し去ってしまうのだ。後に残る物と言え**ば**ほんの僅かな公德心こうとくしんぐらいだろう。もつともその唯一の僕の残骸ですら、あの丸太のような根本からいとも簡単に吸い取られてしまいそうだ。

僕は眠い目を擦りながらキッチンへ行き、愛飲のゴ

ルトベルクの紅茶を入れた。缶の中には極少量の葉が残っているだけで、どうやらストックももう無いようだ。僕は仕方なく、フィルターに残ったままの古い葉の上に缶を開けた。注がれた熱湯は一端古い葉の表層で滞り、固まりつつあるそれをゆっくりと溶解し、そして褐色の液体となりカップへ落ちて行つた。

紅茶を入れ終えた僕は窓際の椅子へ腰を掛け、火傷を負わないように注意深く一口すすり目の前の木製の丸テーブルへカップを置いた。

ここからは死角になっているが、あのクスノキの裏

手には直径四十センチほどの洞穴どうけつがある。根幹の周辺には何百年もの歳月を経て形成された窪みのようなものが幾つか存在するが、その洞穴は地中深くまで侵食していた。陽の強い白昼ですら底部までは視認できず、黒々と口を開けたその様は異形としか言いようがなかった。

しかしそんな洞穴も、十年前に起こった少女の転落事故を機に、現在は茨いばらにより封印されていた。

遠慮気味にドアが開き、郵便配達員の顔が覗いた。

「いらつしやったのですか。ノックをしたのですが、お出にならないものでお留守かと……」

郵便配達員はいつものようにくたびれた紺色の制服をなおざりに着込み、獲物を呑み込み膨張した蛇の腹のような鞆を肩から斜めにかけていた。この男のノックの音は、息絶える直前の鈴虫の音のように遠慮気味であり、いつも聞き逃してしまふ。

「今日も郵便物はありませんよ」

彼はそう言うのと鞆を入口付近におろし、いつものように部屋の中へ入ってきた。

「すいません、あいにくゴルフベルクを切らしてまして……」

彼を向かいの席へ招き僕は言った。

「いえ、構いませんよ。今日は直ぐに失礼しなければならぬので……」

「それはまたどうして？　いつもならゆっくりしていつて下さるではありませんか」

何となく予測はついたが、僕は敢えて問いかけてみ

た。すると、彼の表情が微妙に変化した。

「そろそろ忌日あれが近づいていますからね。今年は私が責任者なので、色々と準備があり奔走させられているのです」

彼は重い口調で言い終えると、窓の外へと視線を移した。つまり、あの丘の上のクスノキを見ているのだ。忌日というのは、十年前の転落事故が勃発した日付である。その年から毎年洞穴の前に薔薇の木を一本ずつ植えるのがこの町の習慣になっているのだが、今年ついぜんは彼がその追善の責任者なのだ。

「もうそんな時期ですか……。早いものですね」

僕は正直な心境を漏らし、冷めつつあるゴルトベルクを一口飲んだ。喉が乾いていたので続けざまに口にしたかったのだが、目の前の郵便配達員に気兼ねをし自制することにした。

「私に言わせてもらえば、あの日から時間が止まってしまったように思えてなりません。あの丘も、あのクスノキも、町の風景も何一つ変わりませんし、私たちはただひたすら薔薇を植え続けているような……。そんな気がしてなりません……」

郵便配達員はそう言うのとゆっくりとした動作で席を立ち、入口に置いてあつた鞆を肩にかけた。

3

頬に当たる霧雨が心地良かった。その細く小さな雨粒はユラユラと空中を漂い、僕が息を吹きかけると簡単に空へ舞い戻って行つた。その雨粒の行く末を最後まで見届けようとしたが、辺りは水中のように霞んでゐるため途中で見失ってしまった。

そんな風も音もない世界に僕と彼女は佇んでいた。二人とも髪や服が体に張り付くほど雨に濡れ、彼女の両結びの髪先からはポタポタと雫が垂れていた。

突然彼女が身を翻して駆け出した。屈託のない笑顔の上を、次々と雫が遠心力により流れ落ちた。

僕は慌てて彼女を追った。彼女が遠ざかると、今まで心地良く感じていたこの場所が、急に物寂しさで一杯になったからだ。

しかし彼女は鈴の音のように笑いながら器用に僕の手を逃れた。時折僕を振り返る彼女の大きな瞳の中に

は、きっと情けない顔をした僕が映し出されていたに違いない。

丘の頂上付近でようやく彼女を捕まえた頃には、僕たちはゼンマイが切れかかったオモチャのように疲れ果てていた。二人とも喉がカラカラになり、空を仰ぎより多くの雨粒を口の中に取り込もうとした。

乗り捨てられた自転車を発見したのは僕だった。車の体の大部分を野草に取られ無様な格好で横たわるそれは、まるでリリパット人にがんじがらめにされたガリ

バーのようだった。

僕は彼女を荷台に乗せ、覚え立ての運転を得意げに披露した。走り疲れていた彼女は僕の背後で大人しくしていたが、僕は彼女が怖がっているものと勘違いをし、悪戯にスピードを上げた。

しかしぎこちない運転に天候状態も相まって、僕たちを乗せた自転車は意図せぬ方向へ走り出した。車輪は、ブレーキによる摩擦を物ともせず急激に加速を始めた。彼女のしがみつく両手が僕の貧弱な腹部に食い込んだが、痛みを感じている余裕はなかった。制御の

効かなくなつたハンドルを渾身の力で握り、目まぐるしく通り過ぎて行く風景に焦点を合わせることだけが僕の精一杯だつた。

すると突然前輪が何か硬い物に弾かれ、僕たちは宙に投げ出された。一瞬、視界の片隅に彼女の華奢きゃしゃな脚が見えたが、その直後新緑の地面を自転車と共に転がり落ちていった。

どのくらいの時間が経過したのだろうか？ 気を失っていた僕たちは、ほぼ同時に意識を取り戻した。

4

恐る恐る体を起こし怪我をしていないか調べたが、どうやら野草がクッションとなり二人ともかすり傷程度で済んだようだ。自転車は数メートル先に横転しており、タイヤの空回りする音だけが辺りに響いていた。ふと彼女と視線が合った。草や泥まみれになったお互いの有様が滑稽で、それまで深刻な表情をしていた僕たちは同時に笑い出した。

雨粒が心地良かった。

町へ買い出しに行こうと外へ出たが、自転車の前輪がパンクしていた。この時間から徒歩で出かけるとすると、帰宅は夕暮れになってしまう。しかも結構な荷物を抱えての帰路になるので、面倒だが修理しないわけにはいかない。出鼻を挫かれた思いを押し殺し、泥のこびり付いたバケツに水を張った。

町へ出るのは一ヶ月振りである。それは随分昔のようでもある、昨日のことのようにも思えた。どちらが自分にとって望ましいのかはわからないが、いずれに

せよ町へ出る時の僕の心境は決して嬉々としたものではなく、むしろある種の自己暗示的な覚悟が必要だった。そしてその覚悟には大抵一月程の時間を要した。つまり逆算的所見から、僕の日常はゴルトベルクの有無に比例するものの、常に覚悟を強いられているということになる。

バケツを抱えた僕は、子供に接するようにタイヤの前にしゃがみ込んだ。そして指を挟まないように注意深くチューブを抜き出し、狭いバケツの中で根気よく破損部分を探した。

「お出かけですか？」

ふと背後で誰かが話しかけて来た。しかし僕には、それが誰であるのかわかっていた。郵便配達員だ。

「ちよつと町まで買い出しに……」

僕は手元から目を離さずに答えた。チューブを部分的に水に浸し、破損箇所が見つからずまた別の部分を浸す。僕は単調な繰り返しに溜息をついた。

しかし溜息をついたのは僕だけではなかった。郵便配達員も同時に溜息をついたのだ。ふと僕の中で極微量の気怠い好奇心が湧き、屈んだ姿勢のまま彼を見た。

彼はボンヤリと立ちつくし、丘の上のクスノキを見ていた。

5

市場は活気に満ち溢れていた。色とりどりの野菜、毒々しいまでに鮮烈な肉塊、子供達を吸い寄せ^{しこ}る嗜好^{しこう}本位^{ほんい}の食物、山積み^{ほんい}にされた日用雑貨、使途不明の骨董品。商品なのか装飾品なのかわからない花々が、それらを鮮やかに演出していた。

人々の喧噪の中に売り声が挟まれ、人いきれも相まって祭りのような光景が、僕が一步市場に足を踏み入れた途端に一変した。不穏な空気とざわめき、嘲笑と哀れみ、好奇の目と侮蔑の目。

僕が一步足を進める度に人垣は引いたが、それらの雰囲気は増していくばかりだった。僕の体は、外圧に耐えられないトマトのように潰れてしまいそうだった。しかし僕は、いつものように平静を装いながら路地裏へ入り、突き当たりの小さなドアを潜った。

「いらっしやい。そろそろ来る頃だと思っていたよ。

「ゴルトベルクだね？」

顔馴染みの初老の店員は、振り返りもせずと言った。
「君の場合は足音でわかる。自覚はないと思うが、どこか逃げるような歩き方だからね」

僕は西日が差し込む窓から外を眺めた。市場と反対側の通りは別世界のように閑散としていたが、ここからでもあのクスノキを観望することができる。

「ゴルトベルクという紅茶はだね……」

店員は、僕を見るときはなしに話し出した。

「本来君のように常飲するものではなく、特別な日にじょういん

煎れるものなのだよ。そう、厳かに慈しみながら喫するものなのだよ」

僕はふと先日郵便配達員の言葉を思い出した。

『私に言わせてもらえば、あの日から時間が止まってしまったように思えてなりません。あの丘も、あのクスノキも、町の風景も何一つ変わりませんし、私たちはただひたすら薔薇を植え続けているような……そんな気がしてなりません……』

もしも本当にあの日から時間が止まってしまったとすると、僕の日常というのは店員の諭すところの『特別

な日』であり、よつて僕の常飲は至極正当な行為である。僕がこの閃きを店員にぶつけてみようとする、タイプライターのようなレジを打ちながら彼が呟いた。「私は君に強く進めるよ、この町から出ていくことをね」

6

花のアーチを潜った。

水底から引き上げられた丸太の様な蔓草つるくさが幾重にも

絡み合い、迷路のようなトンネルを構築していた。時折、アクセントのように色とりどりの花々がアーチを形成していたが、この薄暗い世界には眩し過ぎる存在に思えた。

歩を進めると次々と分岐点が訪れたが、僕はその都度適当な判断を下した。左、そして次は右、そしてまた左、僕は立ち止まることに何故か躊躇ためらいを感じ闇雲に歩き続けた。ふと同じ場所を堂々巡りしている錯覚を覚えたが、それはあながち気のせいではなかったのかも知れない。

花のアーチを潜った。

突起した蔓に何度も足を取られそうになった。歩き慣れないこのような悪路に余程注意を注がねばならないと言うのに、僕は何を急いでいるのだろうか？ 誰かに追われでもしているのだろうか？ それとも誰かを捜しているのだろうか？

花のアーチを潜った。

遠くで微かにあの少女の声を聞いた。耳の奥で鳴り

響く幻聴のようにも思えたが、僕は確かに少女の声を聞いた。それは飼い主に捨てられた子犬のように悲しげな声だった。

気が付くとそれまでの闇雲な歩調が、その声の方向へと向かっていた。

花のアーチを潜った。

これで何本のアーチを潜っただろうか？　どうやら

僕は、あの悲しげな声には遠く及ばない存在のようだ。僕の足は疲労で、招かれざる訪問者を遮断する支え棒

のようになつてしまった。いや、僕の存在そのものが『招かれざる訪問者』なのかもしれない。僕は歩くことをやめ、特別大きく突起した蔓に腰をかけた。

7

郵便配達員が再び訪れたのは、追善の儀の前日だった。彼は相変わず、モンゴルファイエ兄弟の気球のよう膨張した鞆を肩から斜めに掛けていた。彼の表情からは、儀の責任者としての充実感も疲労感も感じら

れず、いつものように無表情だった。

彼が僕の向かいの席に座ったのを見届け、僕は彼の分のゴルトベルクを煎れる為に席をたった。

「あなたは、これからどうするつもりですか？」

そう問われ、僕はてっきり明日の儀のことかと思ひ「明日はもちろん僕も出席します」と答えた。

「いえ、明日のことではなく明日以降……つまり今後
のことですよ」

時間が止まっていると錯覚している人間が、妙な事を言うものだと思いつつ僕はしばし考えた。しかし答

えは出るはずがない。この十年幾度となく考え、それでも解決できなかった問題だ。むしろ僕は、今現在こうしている事がその答えなのだと思っている。

「私が提案しましょう。あなたはこの町を出て行くべきです。もうこうしてお茶をご馳走して頂けなくなるのは寂しいことですが、あなたにとってはその方が良いでしょう。この時間の止まってしまった町を出ることです」煎れたてのゴルトベルクを彼の前に差し出すと、彼は美味そうに一口すすってそう言った。

確か以前、誰かにそんな事を言われた気がした。し

かし記憶を辿って見たものの、結局思い出せなかった。

8

散り逝く花びらのような鈴の音で目が覚めた。一定の距離を保ち、それでいて無秩序に聞こえるその音は、夜更けと共に僕の側^{そば}へと近づいてきた。追善の儀が始まったのだ。

そつと深紅のカーテンを開くと、朝靄に包まれた蒼白い世界が見えた。ベールのような朝靄は穏やかな海

面のようにゆっくりと揺れているが、ほんの僅かな動作でも消滅してしまいそうだった。

ガウンを纏まとい外へ出ると、丁度行列の先頭が見えた。顔は確認できないが、先頭は郵便配達員に間違いない。鈴を片手に持ち、朝靄を荒立てないよう列を率いている。上に向けたもう片方の手のひらには、薔薇の種が一粒乗っているはずだ。この後、行列は丘の上の巨樹まで続き、洞穴の元へその種を植える。そして黙禱もくとうを捧げ、各々が各々の想いを巡らせ儀は終わる。

僕はドアにもたれて行列が近づくのを待っていた。

最後列が一向に現れないのは、今年もほぼ全員の町民が参列しているからだろう。

朝靄に包まれた人々は、まるで羊の群のシルエツトのようだった。羊飼である郵便配達員が笛の代わりに鈴を鳴らすと、それまで微妙に乱れていた調和が静かに元に戻る。僕も、あの群れの中の一匹になるのだろうか？

僕は行列から巨樹へと目を移した。樹高二五メートル、幹周二十メートルのあのクスノキは今何を考えているのだろうか？ この年に一度だけやって来る人々

を見て、何を想っているのだろうか？　キノコ雲のよ
うな樹冠は、僕たちをこの草原と共に包み込んでしま
いそうだった。

再び鈴の音が響き、行列は僕の目の前をゆつくりと
通り過ぎて行く。一瞬郵便配達員と目が合ったが、昨
日と同じ彼の表情からは何も読み取れるものがなかつ
た。誰もが限りなく静粛化された歩調で、そして謹厳きんげん
な表情を心持ち俯け、これから始まる儀に対し受容的
な姿勢を露わにしていた。

その時、僅かに風が吹き朝靄が動いた。と同時に巨

樹の樹冠の一部が揺れ、数羽の小鳥が一斉に飛びたつた。しかしその一瞬の出来事は、誰にも気付かれることはなかった。

参列をやめ部屋に戻った僕は、必要な物を鞆に詰め込み始めた。ランプと最小限の食器、そしてストックしてある全てのゴルフベルク。

数少ない衣類をまとめていると、引き出しの底から懐かしい物が出てきた。白いレースのリボンだった。まるでローラーにでも押し潰されたかのような有様

だったが、純白は保たれておりこの薄暗い室内ではとても眩しかった。

僕は十年振りの偶然に感謝し、丁寧にリボンを伸ばした。すると微かにあの少女の髪の毛の香りを感じた。しかしそれは気のせいだったのかもしれない。僕はしばしそれを眺め、皺しわにならないようにポケットへ入れた。

そして町を出た。